
ファンタジーっぽいもの

ヒュンケル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーっぽいもの

【Nコード】

N8745G

【作者名】

ヒュンケル

【あらすじ】

世界を恐怖に陥れようとする魔王を、勇者が倒しに行くというありきたりなファンタジーを根本から打ち砕く、超なんでもありスーパーファンタジー物語！新たな勇者と魔王の物語がここに開幕する！

第1話

平和っぽい世界ゼルギアースを支配しようと、魔王ミア率いる魔王軍が世界を支配しようと大暴れをしていた。

このままではゼルギアースが暗黒に飲み込まれてしまう。それを阻止すべく、アーカムト王国の若き王シャギは、勇者ラストに魔王討伐の任務を与えるのであった！

「それじゃ、ちゃっちゃと頼むよ」

「ちよい待てコラ」

ファンタジー小説連載開始早々わずか七行目にして、勇者ラストは国王であるシャギにツツコミを入れた。最初のツツコミ最速時間の新記録を更新したんじゃないだろうか。

「新記録なんてどーでも良いんだよ。俺はなににもギネスブックに載りたいわけじゃねえ」

「ギネス・ファンタジー・レコーズに連絡しとくよ」

「連絡すんな、それにファンタジーじゃなくワールドだ。勝手に新たなギネス社作ってんじゃないやねえ」

《注意》ギネス・ファンタジー・レコーズは架空の組織です。

「知ってるから、注意書き書く必要すらないから」

「で？ 一体ラストくんはなにに対してツツコミをぶっつけたのかな？」

「ぶっかけた！？」

玉座の間には何人もの兵士がいるが、皆が優しい微笑みをラストに向けていた。

下品な男だな――と。

「蔑まれてるだけだし！ やめてその微笑み、なんで俺に向けるわけ！」

気を取り直した様子で、ラストはシャギを睥睨して、

「冒頭のノリで簡潔に世界観を説明して、なんの脈絡もなく国王が勇者に魔王を討伐してくれーって頼んで物語スタートってのは、ファンタジーRPGゲームではありきたりなんだよ」

そんな勇者の言葉に国王は、

「どこがだい？」

素で返しやがった。

「どこがって、某大作RPGの第一作目みたいじゃん。このあと国王が勇者に安い道具一式を渡すだけだろ？ なぜかたいまつ付きだよ。ありきたりなんだよ、ファンタジーRPGのスタートイベントがナレーションの世界観説明に国王が勇者に行ってらっしゃい？ 今のご時世はな、意外性あるストーリー。迫力のストーリー。すっげえストーリーのあるゲームを求めてるんだよ」

ストーリーばっかにこだわる勇者である。

「ああ、ラストくん。君はどうやら勘違いをしているようだね。ありきたりじゃないよ」

「なんでだよ、理由を20文字以内にまとめてみやがれ」

「だってこれ、ゲームじゃなくてなろう小説だからあああああああ！」

「そーでしたなあ、俺がバカだったよコンチクショオオオオ！」
おまけに20文字を余裕で超えていた。

——国王準備中——

「ゲームだろうが小説だろうがオリジナル性ゼロじゃねえかよ。やっぱありきたりだろこれ」

ようやく気付いたようである。

すると、シャギが玉座の間に道具一式を持って戻ってきた。周りの兵士たちは談笑している。誰も手伝う気はないようである。

「ふう、ラストくん。旅に必要な道具だよ。じゃんじゃん持ってい

きな」

「ああ、ありがと——いや、ちょっと待て。お前、城の中でいじめられてねえ？」

「いいえ、ケファイアです」

「ちよっとおおお！ 誰かこの人に友達いないんですかああああ！」
国王は孤独だった。

「さてと、どんなアイテムが入ってるんだ？」

勇者は宝箱を開けた。

「地の文がゲームのメッセージ文みたいになってるし！」

勇者は100万円を手に入れた。

「金の単位もって考えろ！ ってか100万すげえ！」

勇者は勇者の剣を手に入れた。

「なんか最強武器っぽいの手に入ったぞ！」

勇者は勇者の服を手に入れた。そろそろ着替えてください。

「まさか裸だったの！？」

勇者はエロDVDを手に入れた。

「おお……っ！」

勇者はスカンターを手に入れた。

「なんか戦闘力測る装置の紛いもんあるぞおおー！！」

持ってきた全ての道具を手にしたラストを見て、シャギはご満悦だ。

「これで全部？ いや、100万円と勇者の剣と服は嬉しいもんだ。でもこのスカンターってのはなんだ？」

「スカンターは、耳に着けるんだよ。モニター部分が目の前に行くようになってるから、あとは装置に付いてるボタンを押せば、モニターの視界に入っている奴のレベルを測ることが出来る」

どこぞのバトルアニメに出てくる機械にそっくりである。

「あと、自分の能力も見れるから、確認した方がよいよ」

「マジでか、便利だな。レベル1じゃないことを祈りたいもんだ」

期待しながら、ラストはスカンターを装備して、自分の能力を確認した。

機械音が鳴り響くと、ピピッというアラームが鳴り、能力値がモニターに表示される。

ラスト——レベル99。

「カンスト!？」

どんな敵もイチコロな能力だ。

「へえー、レベル99か、凄いじゃないかラストくん」

「魔王なんて楽勝じゃねえか? あ、シャギのレベルはどんなもん
だろ」

シャギの能力を測ってみた。

シャギ——レベル200。

「レベルの上限値はいくらだコラあああ!」

あまりの力の差にラストはマジでショックを受けたようだ。そりや国王が勇者よりレベルが101も上だったら誰でもショックを受けるだろう。

「あはは、僕の方が強かったみたいだね」

「シャギが魔王倒し行けよ、城の生活辛いんだろ? 友達いないんだろ?」

「ちょっと核心突かないでよ、本当に傷付くよ。さあさあ、早く魔王ミアを倒す旅に出ちゃいな。あ、城下町でいろいろ道具を揃えた方が良いよ」

「わーってるよ。ところで、DVDプレーヤーはないの?」

「ないね」

「じゃあどうやってエロDVD観んだよ! 生殺しか!」

「心眼で観るんだね」

「ホワイ？　なぜ？　しかもこのDVDのタイトルがまた俺の性欲を掻き立てる……！」

誰かこの勇者を黙らしてくれ。

何はともあれ、こうして勇者ラストの、魔王ミアを倒す旅が始まったのであった。

「ほうはーはひのひへはをひはんはへー？」

入れ違いで、腰の曲がった老人がやって来た。一体どこの国の言葉なのか、通訳してみよう。

（王様ーわしの入れ歯は知らんかねー？）

「単なる入れ歯を無くしたジイさんじゃねえかよ」

そこでふと立ち止まる。自分のレベルは99。シャギのレベルが200。なら、一般人の、しかもヨボヨボの入れ歯のないジイさんのレベルは如何なものか。

ラストはジイさんのレベルを測ってみた。

ただのジイさん——レベル500。

「どーいうこっちゃあああああ！」

——勇者傷心中——

町に出たラストはスカンターを外し、まずは広場のベンチに腰を掛けて一息吐く。

彼の表情はどこか重たい。これからラストに襲い掛かるであろう数々の脅威に恐れているのか。本当に魔王を倒し、ゼルギアースに平和を取り戻すことが出来るのか。ラストの胸には不安ばかりが押し寄せているはずだ。

（旅の間、エロDVDってどうやって観りゃ良いんだ？　あとどこでどう処理を……）

誰かこのバカどうにかしろ。

悶々と悩んで小一時間——悩みすぎだ。

途端。ラストを現実につ張り戻す声が耳に入った。

「ウィルムくん、どこですかー？」

ふと、顔を上げた。広場の噴水前でキョロキョロと辺りを見回しては、トテトテと小動物のように動きまわる天使がいた。

いや、天使に見えた。

噴水をバックにキラキラと輝く金色の長髪で、体を白いマントで覆わせている。

あれこそまさに美少女の中の美少女。雪のように白い肌はプニプニ触感間違いなし。マントで体のラインは見えないが、おそらくはすらりとした美しく細い、滑らかな肉体だ。見える、見えるぞ、彼女のマントの奥の服装が。膝が隠れるか隠れないかの長さに設定されたフリルの真っ白なスカートと、肩まで露出された銀色のノーズリーブ。胸は大きいと小さいで例えるならば小さい方だが、手を被せればすっぽりと収まる程度の理想的な胸。幼さ残るその容貌は天使か女神か。いや、この世のありとあらゆる女性の頂点に君臨するであろうキング・オブ・美少女！

「勝手に俺の思考のように描写してんじゃねえよ！ 『体を白いマントで覆わせている』の次の改行からは俺の描写じゃない！」

興奮し、エロDVDのことすらも脳内でスパークして消え去ったラストは思う。「おお、神王アルファよ、私は生きていて幸せです」と。

「ちつとも思ってたねえよ！」

今この広場には自分と彼女しかない。やるなら今だ！ さあ、足を一步前へ前進させろ。欲望は十分か？ 命乞いの時間は？ 自分の人生に遺言書は？ さあ、急げ、急げ、急げ。勇者ラストよ、目の前のこの世の者とは思えぬ純白の美少女を、貴様の醜き欲で乱してしまえ！

「サァイエッサー！」

「勝手にセリフを入れるなああああ！」

勇者は駆ける。己の欲望に身を任せて。負けるな！ 勝て！ なのに！？ ラストよ、真の勇者になるために！

勇者ラストの戦いはこれからだ！

ヒュンケル先生の次回作にご期待下さい。

「勝手に打ち切りやがったあああ！ これここで終わったら小説家になろう史上最低最悪な変態エンディングになるし」

――作者自重中――

閑話休題。

「本編進めようぜ」

ラストの暴走には困ったもんだ。

「オイコラ待てや」

噴水の前でキョロキョロしている少女はラストと同じくらいの年齢に見えた。ちなみにラストは白寿だ。

「レベルと年齢がまさかの一致！？ いや、驚くところそこじゃねえや、99歳の勇者って悲しいでしょーが！」

おそらくは二十歳くらいだろう。

「言い直すなら言うんじゃないよ」

不安そうな顔はやがて泣きそうな顔へと変わっていた。誰かとはぐれたのだろうか？ 町の中とはいえ、女の子一人でうろついているじゃないかと危険だろう。

思い立ったラストは、少女に近付いた。

「おい、どうしたんだ？」

「ひあっ」

急に声を掛けられて驚いたのか、少女は肩を震わせた。その動作は子犬のようで可愛いじゃないか。変態勇者め。いつ貴様の欲望をその少女にぶつけるんだい？

「あれ、ごめん……なんか……目から水が……」

「は、はあ……あの、貴方は？」

警戒しながらも、当然の疑問を問われたので、ラストは自己紹介をする。

「俺はラストってんだ。一応、魔王を倒すために旅に出たばっかの勇者だ」

「勇者？　ラストさんって言うんですね？　貴方は勇者さんなんですか？」

「ああそうだ。やるからにはマジで魔王を倒して、世界を平和にするんだ」

この物語、始まってからようやく出た真面目な言葉であった。

すると、少女は驚いたように目を丸くしたが、すぐに先程の不安そうな顔が嘘のように消え、満面の笑みへと変わる。

「そうだったんですか。貴方が勇者。あ、申し送れました。私の名前はミアと申しますです」

「へえ、ミアっていうんだ。よろしく……ん？　アレ？　ごめん、なんか急に全身から嫌な汗が……あの、ミアちゃんって、なにをやってるのかな？」

聞き覚えのある名前だと思った矢先、なぜか体の芯まで震えるほどの拒絶反応が出たようだ。ラストはブルブルとバイブレーションのように振動している。

ミアは様子のおかしいラストに不思議そうに首を傾げるも、問われた質問に対して、またニコッと汚れた心が洗われるような笑顔に向けて、

「今は一応、世界の支配を目指す『魔王』をやっています。ラストさんは勇者さんなんですね。ということは、私を倒すそうとしている人なんですね！　会えて嬉しいです！」

なぜか彼女の周りに花が咲き乱れているように見えるが、ラストの周りは吹雪となっていた。

完全に固まり、呆然とするラストは道具袋からスカンターを取り出し、装備した。そして、ポチッとミアのレベルを測ってみると…

…なんか、数値がグウィングウインと上昇している。

魔王ミア——レベル9999……。

とんでもない数値で止まったのに、なぜか測定完了のアラーム音が鳴らない。

と、思った矢先。スカンターは唐突に爆発してしまった。

「……………ッ！」

これぞ本当のカンスト。スカンターで測れるレベルの上限を遥かに超えてしまい、機械の限界に到達し、耐え切れずに爆発してしまったのだ。「このスカンター故障してやがるぜっ！」と叫びたくなる。

全身の産毛が総毛立ち、汗が滝のように流れ出る。壊れたスカンターを見つめ、わけもわからずにラストを見つめるミアを見つめ返す。

ラストは思った。ああ、この可愛い女の子は天然ちゃんだなと。とんでもなく微笑ましく、綺麗な笑顔をミアに返し——。

——ラストは全力で逃げ出した。

「なんでラスボスと最初の町で遭遇すんだよおおお！」

第1話（後書き）

人はこれをテンション小説と呼びます……え、違う？

ネタなんて自由なんだよオオ

しかしプロットはしっかり作ったんだよオオ

更新がまばらだと思えますので、暇なときに応援よろしくおねがいします。

読者が逃げても知らんぷりします。単なる開き直りです。

第2話

勇者の全力逃亡は広場の入り口付近にて終了した。

魔王は勇者の脚力を遥かに凌ぐ、豪脚の持ち主なのだ。

「豪脚なのか？ あのマントの下の脚は太いのか？」

「最近太ったかも知れませんです」

前言撤回。美脚の間違いでした。

「意味わかんねえよ！」

逃亡を図ったラストだったが、なぜか眼前にミアがいることに愕然とする。空間移動と呼ばれる力である。

「卑怯だなコンチクショー！」

「あ、あの、急にどうして逃げちゃうんでしょうか？」

何故か半べその魔王。

「まだ死にたくありません！」

本気で逃げたい勇者。

「私、実は勇者さんに伝えなければならぬことがあるんです！」
「えっ!？」

頬を赤らめるミアに、ラストは心臓が跳ね上がった。

「あ、あの……私、私……実は……ラストさんのことが……」

（おいおい、ここで愛の告白かよ！ 勇者と魔王のカップリングが誕生しちゃう？ 禁断のカップリングに読者も興奮！？ 小説始まってこれといった一波乱もないまま、ヒロインとエンディング迎えちゃうのか!?!）

そうは問屋が卸さない。

「私……ラストさんのことが……邪魔で邪魔で仕方がないので、殺したいと思います！」

「そうですよねえ、さっきの死亡フラグでしたよねええええ！」
レベル9999カンストの魔王ミアの攻撃。ミアのデコピンが炸

裂した。

「デコピン？ あはは、可愛い攻撃だなあ。こんな可愛い女の子にデコピンされるなんて夢のようだ」

ラストの肉体が消滅した。

「消滅っ!？」

——デッドエンド。

「おお勇者よ、死んでしまうとは情けない」

お決まりの国王の名言により、勇者は復活した。

「小説なのにゲームみたいなノリだなあオイ！ 小説なのに速攻で主人公死んじゃったぞ！ 一体どこに分岐ルートあったんだよ！」

「うるさいよラストくん。これはエロゲじゃないよ、ファンタジー小説だよ。そんな選択肢がどっかに潜んでるわけないじゃん。本当に選択肢があるのだとすれば、それはラストくんの自由意志で決まるのさ」

『1 そうだよな、シャギの言うとおりだ

2 殺してでもうばいとる

3 必ず魔王を倒してくるぜ』

「俺の自由意志はどこにあんだよお！ しかも二番目の選択肢って念願のアイスソードを手に入れたオッサンに対する伝説の選択肢じゃねえかよ！」

なにを奪い取るつもりなのだろうか。DVDプレイヤーだろうか。

「殺人犯してまで手に入れるもんじゃねえ！」

「どうでも良いからラストくん。早くイベント進めたまえ」

「イベント言うな！」

「ちなみに、ゲームの特権である、死んでも国王の前で蘇るシステムは現時点をもって終了するからね。じゃないと緊迫感のないグダ

グダなカス小説になるから」

「すでにグダグダなカス小説だよ！」

お前の方がカスだ。

「誰かこのナレーションどうかしろ！」

愚痴を垂れながら玉座の間をあとにしようとするラストに、シャギは急にシリアスな顔付きになり、

「ラスト」

「なんだ？」

「可愛い女の子に欲情して、勇者にあるまじき行為をするのだけはくれぐれもやめるんだよ！ その為にエロDVDをあげたんだから！」

「だったらDVDプレーヤーを寄越しやがれ！ こんな欲情すんなっつー方が無理なんだよ！ これが男の現実なんだよ！ 男は我慢できないときがあるんだよ！」

男の現実を怒りながら叫ぶ勇者というもののどうかと思う。

——勇者移動中——

「さっきはまさかのデッドエンドを迎えちゃったが、今度はそうは行かねえぞ。さて、ミアっていう魔王はと……あ、やっぱりな」
再び広場にやってきたラストは噴水の前で不安そうにキョロキョロしているミアを発見する。

「よし、今度は死なないように注意しないと。頑張れ俺の自由意志！」

ラストは今、全身を縛り付ける不安と緊張に打ち勝とうとしていた。今度こそ生き残ると、デコピンで肉塊一つ残らずに死ぬのはもうコリゴリだと！

「よし、行くぜ！」

「どこに行くんでしょうか？」

「あそこにいる魔王ミアを、俺の欲望の捌け口にしてやるのさ！」

「じゃあ私は、勇者ラストさんを今度こそ、魂ごと消し飛ばしてみたいと思いますです!」

ラストの表情が主人公にあるまじき、モザイク確定の恐怖映像と化していた。

先程までは噴水の前にいたはずのミアが、ラストの背後に空間移動したのだから仕方がない。だからといって、気付かずに変態発言を堂々とするのも如何なものか。

相変わらずのニコニコ笑顔だが、どうやら勇者に対する殺意だけは備わっているようだ。さすがは魔王。さて、ラストは一体どうやってこの窮地を脱するのだろうか。というか、わざわざ魔王がいる広場に戻ってきた意味がどこにあるのか、本気でラスボスを襲おうとしていたのだろうかこの勇者は。

「ま、まま、まあ待て! お前、ミアって言ったよな? 本当に、本物の魔王なのか? この作品のラスボスなのか?」

「はあ、一応そうみたいです。私は本物の魔王で、ラスボスらしいです」

「なんでそのラスボスの魔王ちゃんが最初の町にうろついてんだよ。完全に間違えてるよ君。普通は勇者が魔王のそこに向かうんであって、魔王が勇者のそこに向かう必要はないんだよ」

正論である。

「そんなの誰が決めたんですか? これってありきたりな剣と魔法のファンタジー小説ですか? 違いますよね?」

これぞ正論返しである。

「どうやらミアは大人しくラストダンジョンで待っているほどお約束的なラスボスではなかったようだ。」

「ふっ、そうか。そりゃ好都合だな、まさか町から一步も出ずに魔王を倒せるんだからな」

なぜか急に胸を張って強気の姿勢を見せている。
脚がガタガタ震えている。

「バラすな!」

心配するな勇者ラストよ、お前と魔王のレベルの差は、わずか900だ。

「絶望的数値じゃねえかよ！ 最凶やり込みRPGじゃねえんだから、もう少しレベルの上限値を考えろ！」

思い出せラスト。シャギとお前のレベルの差は101だ。そして今回の魔王ミアは、お前のレベルの101倍あるのだ。

それに、ラストは9900の差よりは楽に思えると安堵する。

「安堵してないから！ 101の差と101倍の差は雲泥の違いがあるからあ！」

果たしてそうだろうか？

「そうなんだよ！ なんで俺が間違っているかのような言い方なんだよ！ 俺とミアの力の差って、ほら、あれ、地球に襲来した初期のベジータと最終形態フリーザくらいの差があるから！」

「あ、あの！ フリーザとバイキンマンってどこか似てると思うんですけど、ラストさんはどう思いますか？」

「知るかよ！ 声が同じなんてどーでもいいの！」

怒鳴られたミアは目に涙を溜めて怯えている。この外道めが。

「お前はどっちの味方だ！」

「あのー、ラストさん」

「なんだ？」

「そろそろ……また殺して良いでしょうか？」

「アハハーこいつはうっかりだー」

逆にラストが恐怖で涙した。果たしてどうやってこの窮地を脱するのだろうか。

（こ、こうなったら……玉砕覚悟でやっちゃまうか！？）

玉砕どころか消滅だ。というか、いつそ死ね。

「そ、そ、その前に魔王ミア！ お前、さっきウィルムくーんって叫んでなかったか？ 誰だそいつ」

全力で話を逸らしたが、ようやく待ちに待った本編進行である。ここまで来るまでどれだけグダグダであったことか。

尋ねられたミアは目を丸くして、すぐに叫んだ。

「ああー！ すっかり忘れてました！ どうしましょう？ 私、ウィルムくんとはぐれてしまってたんです！」

「だから誰」

「私の大切な仲間です！ 一応、『霸王』って呼ばれているんですけど……」

（うわぁ……めっちゃ強そう……）

マジで逃げたくなったラストだが、逃げてもすぐに追いつかれてしまうことは知っているので諦める。

一方のミアは目尻に大粒の涙を溜めて、今にも泣き出しそうだ。その姿に、男性ならば心打たれ、どんな穢れた男性でも助けてやろうと手を差し伸べるだろう。しかし、ラストはミアの恐ろしさを知っているものだから、迂闊に助けようとは思わないはずだ。

「うう……可哀想だなあ、迷子になったんだなあ……よし、この勇者が一肌脱いでやるぜ！」

魔王の涙に屈した愚か者だった。

「安心になってミア。そのウィルムって野郎が見つかるまで、俺と一緒に居てやるぜ」

「え、え？ ほ、本当ですか？ あの、でも、それじゃラストさんにご迷惑が……」

なんて優しい魔王だ。

「お気遣いご無用。可愛い女の子が泣いているのを、黙って見過ごせるほど、俺は落ちぶれちゃいねえよ」

相手が魔王でもお構いなし、誰でも助けるといふ精神は素晴らしいの一言だ。

（そして、一気にラブラブになって、あわよくば気を許した彼女を自宅に連れ込んで……ウヘヘ）

前言撤回。

「ありがとうございますです！ 私、このご恩は一生忘れません！」
「おう、そんなじゃ、適当に町でもぶらつくとするか。丁度、店を回

って行きたいと思ってたしな」

「はい！ それではレッツゴーです！」

こうして、勇者と魔王の謎のデートが始まった。

完全に油断している勇者を、ミアは無垢な眼差しで見つめながら、（ウィルムくんが見つかったら、この王国ごとラストさんを消し炭にしないといけませんね！ 私、頑張れます！）

ラストの運命や如何に！？

第3話

「ラストさん、一体どこに行くんですか？」

前方を歩くラストに、後ろからミアは尋ねてみると、ラストは立ち止まって笑顔で振り返る。

「愛の巣だ」

「……っ！？ え？ え？ ええ！？」

鳥肌が立ち、身の危険を感じた魔王であった。一瞬とはいえ魔王を恐怖させるとは、さすが勇者だ。

「はっはっは、褒めろ褒めろ！」

確実に変態ロードを突き進んでいる。

「ごめんなさい！ ふざけすぎました！」

——武器屋。

「いらっしやいませー」

店主が出迎えてくれた。店の中にはたくさんの武器が並んでいる。

「わぁ、武器がたくさんありますです！」

「いらっしやい、お客さん。一体なにが欲しいかね？」

こちらに近付いて来た店主に、ラストは聞いてみた。

「この店で一番強い武器はなんだ？」

「はいはい、ちよっと待ってな。今持ってきてやるよ」

そう言って、店の奥に消える店主。ミアは店内の武器を輝いた眼差しで見つめる。興味でもあるのだろうか？

「凄い強そうな武器ばかりです！ これ全部奪えば、魔王軍の戦力は大幅アップです！」

物騒なことを言う女の子だ。

「あっはっは、好きなモノはなんでも買ってあげるからねー」

なんか、現実によくいる、女の為に金を惜しまず使う愚かな男の

ようだ。

すると、店主が戻ってきた。

「ほらよ、持って来たよ」

「おお、どれどれ？」

とは言っても、すでにラストは勇者の剣という、最強武器を手に入れているのだ。どんな武器もこれには劣るだろう。

「この店最強の武器は、『最強の剣』だよ」

名前が最強だった！

「買った！」

「101万円だよ！」

お金が足りなかった！

「ちよつと待てえ！ やけに101って数字に遭遇しているように思えるのは気のせいかな？」

知るかタコ。

「……………」

「え？ あれ？ なんでラストさんは泣いているんでしょうか？」

泣きたい年頃なのだろうか？

店主は最強の剣をしまうと、別の武器を持ち出した。

「攻撃力は下がるが、こんなのはどうだ？ アイスソード」

念願のアイスソードが売っていた！

「の、レプリカだよ」

んなもんを売ろうとするな。

レプリカを買う客なんて、果たしているのだろうか。

「買った！」

ここにいた。

すると、ミアはラストの袖を引っ張って、首をぶんぶんと振っている。なんと愛らしい動作なのだろうか。

「ラストさん。この武器は人一人殺せませんよ？ こんな買う価値はないかと思われるのですが」

やはり魔王は恐ろしい。平気で人一人殺せない口にした。

「え、本当かよ？ おいテメエ、人一人殺せねえ武器を売るんじゃない？ 詐欺かここは！」

貴様の存在が詐欺だ。勇者が人一人殺せないなどと口にするな。
「そんなことより、DVDプレーヤーは売ってないのか？」
まだ引っ張るか。

店主は真剣に思い悩むそぶりを見せ、

「ここにはないね。道具屋にならあるかも知れないが……」

「よっしゃ行くぞ、ミア！」

DVDプレーヤーのために行動が迅速になる勇者であった。

――道具屋。

ある意味ここがラストの最初の目的地と言っても過言ではない。
ここには旅の必需品となる道具がたくさん置かれているはずだ。

「いらつしゃいませー。お客さん。なにが欲しいですかい？」

「この店のラインナップを教えてください」

「はいはい、ゆっくり品定めしな」

店主は店の商品一覧をラストたちに見せた。

『エッチな本	100円
エロDVD	100円
薬草	10円
万能薬	50円
あぶら取り紙	3円
プレステ4	398000円

これはギャグなのだろうか？ マジなのだろうか？

「おい！ なんなんだよこの店は！」

ラストが大声を出して怒鳴りだす。さすがにこのラインナップには文句があるようだ。

「なんでDVDプレーヤーがないんだよっ！」

文句は文句でも、最低な文句だった。

「……あの、ラストさん。DVDが観たいんですか？」

「ああ、勇者は必ず観なければならぬ、凄いDVDがあるんだ」
「勇者が必ず観る必要性はない。」

「ですけど……テレビもないとダメですよ？」

「な、なんだとっ!？」

ラストの全身に電撃が奔る。まさか気付かなかったのか。

「し、し、し、知ってたよ! 実はテレビも必要だなんて思ってた

んだよ! 本当だからな!」

「あと、アンテナはどうするんですか? 電源のコンセントも必要
ですし……旅の途中でどうやって観るんでしょう?」

どうしようもない現実にはラストの額から汗が噴出した。

(おいっ……マジかよ! あのクソ国王、本気で心眼で観ろっての
かよ!?! なんだ? エロDVDの中にダイブしろってのか? フ
ザケルナあああああ!)

どうでも良いことでマジギレする勇者というのも珍しいもんだ。

「ラ、ラストさん……大丈夫でしょうか?」

「心配するな、俺は冷静だ……冷静なんだっ! も、もう我慢でき
ねえ……うおおおおっ!」

どっからどう見ても冷静ではない。むしろズボンを脱ごうとして
いるのだから確実に危険だ。

「ひ、ひあ……! な、なにやっているんでしょうか!? ズ、ズ
ボンを穿いてくだ……さいっ!」

「ばあっ!？」

赤面するミアがラストの腹部に蹴りを叩き込んだ。手加減してい
たようだが、ラストの内臓が破裂してしまい、口から血が噴出して
いる。奇妙な声も上げてしまって、勇者は絶体絶命だ。

「あれ? ところで、プレステ4ってなんですか? 3じゃないん
ですか?」

「ああ、知らないのかいお嬢ちゃん。プレステは新たな高みへ到達

したんだぜ」

せめて現実世界で開発されているものを商品にしろ。なんでよりによってファンタジー小説の世界にプレステ4が発売されているのだ。

「あ、でもサンキュッパなんですネ！　なかなか良いお値段です！　良く見る魔王。サンキュッパはサンキュッパでも、桁がゲーム機にしては迂闊に買うことの出来ないサンキュッパになっているぞ。というかお金に恵まれた家庭しか買えないと思う。

「プレステ4にはDVDを観る機能が備わっていないから、過度な期待はしないでくれよ」

DVDの観れないプレステに価値はあるのだろうか。

「来週にはドラクエ25が発売するぜ」

ドラクエは永遠に不滅らしい。というか出すぎだ。

ふと気付くと、腹部を押さえ、口から血を流しているラストは死にそうな顔で起き上がっていた。

「あ、ラストさんおはようございます」

「……あ、アイテム買わないと……薬草と……万能薬をつ……」

危険な状態らしい。店主に買うアイテムを耳打ちで告げた。

「はいよ、エッチな本を5冊だな？　まいどあり！」

言葉と行動に大きな矛盾が生じている。

「あ、間違えた……いや、間違えてないや」

確実に間違えている。エロ本で体力を回復させるつもりだろうか。

「ミア……頼む、俺と寝てくれ！」

魔王になにを言うのかこの勇者！

「構いませんよ？　瞬殺しますので」

笑顔でこの発言はちよつと怖い。ラストは恐怖で震えている。

――勇者買物中――

一通りの買い物を終えたラストは、町の中をぐるりと見学してい

た。通り過ぎる人々は皆、ミアの可憐な姿に眼を奪われてる。誰もこの少女が魔王だとは思っていない様子だ。

「あらあら、可愛いお嬢ちゃんだこと！ あんたたち、もしかして付き合ってるのかしら？」

大阪のオバちゃんみたいな老女が近付いて来た。

「大阪！？ おいコラそんな場所知りません！」

必死になるラストの気持ちは良くわかる。なにが哀しくてファンタジー世界を舞台にした作品内で大阪という単語が出なければならぬのか。

「いや、ってかあんたが勝手に言ってるだけだし、あとプレステ4やDVDある時点で世界観は意味不明だし」

と、そこでラストは老女に向いて、

「いえ、知り合いとはぐれたようなので、一緒に探しているだけです。そんな関係じゃありませんよ」

真顔で言った。先程まではふざけていたが、しっかりと勇者と魔王という関係は理解している。それでもミアの行動には最大限の注意を払っているのだ。

「あらそうだったの？ でも気をつけてよ、最近は魔王軍の動きが活発になってるらしいからね。なんでも、アーカムト王国の西にある大きな都市が滅ぼされたって話じゃない」

その言葉に、ラストは眉を顰めた。自分の横で笑顔のままにいるミアを一瞥して、老女の話を聞く。

「もうすぐ王国にまで魔王軍が来ちゃうのかしらね？ ああ怖いはずだった！ 魔王なんてさっさと勇者にでも殺されちゃえば良いのに、いっそ、神王アルファ様が天から降臨して、魔王軍を皆殺しにしてくれば良いんだけどねえ！ あんたたちもそう思うだろう？ ねえ！」

そのときだ。ミアの右手から、殺意の籠った光が溢れ出ようとしていた。相手を死に陥れるであろう攻撃魔法を老女に放とうとしているのだ。

途端。ラストがミアの右手を掴んだ。笑顔のまま、老女と楽しく会話を続けながら、全力でミアの右手から放たれんとする攻撃を阻止していた。

「じゃ、おばちゃん。俺はそろそろ彼女の知り合いを探さないといけないからさ、もう行くよ」

「あらそうなのかい？　じゃあね！　お二人とも仲良くね！」

終始、ミアが魔王だと気付くこともなく、老女は騒がしく去って行った。

すると、ラストがミアの手を離し、薄く笑みを浮かべたまま彼女を見る。その右手に光はなかった。攻撃魔法は解除したようだ。

「いけないな。こんな町中で、騒がしいおばちゃんに目掛けてなにをぶっ放そうとしてたんだ？」

言葉の中に敵意が宿っている。そんな勇者に対して、魔王は穏やかに微笑んでいる。

「なについて、騒がしいから殺そうとしただけですけど？　なにか問題があるんでしょうか？」

「大有りだ」

「なぜですか？」

「テムエはウィルムくんとやらを探してるだけで良いんだよ、なに勝手に勇者の前で一般人を殺そうとしてやがんだ？　俺が黙って見逃すと思ったか？　俺はそこまで落ちぶれちゃいねえ」

「驚きましたです。意外とやるんですね、ラストさんは優しい方でしたから、私に対しても油断しているのかと」

「はっは、デコピンで殺されて、腹蹴られて内臓破裂までしたんだ。いくら欲求不満な俺でも警戒しまくりなんだよ」

「そうでしたか……でも、ラストさんが私に腹を立てるように、私も腹を立てています。邪魔をしないでくれませんかね？」

「舐めてるねえ、邪魔するに決まってんじやん」

「結局は無駄ですよ、ラストさんは弱いんですから」

「でも邪魔してやる」

「弱いのに？」

「弱い俺がだ」

微笑む二人の間には一触即発の空気が流れていた。そこで、ミアはふとなにかに気付き、

「あ、そろそろですね」

と言って、勇者から離れ出す。

「さっきのおばちゃんの言ってたことは本当か？ 西の都市を滅ぼしたってのは」

「本当ですよ、ウィルムくんが消滅させてくれました。今頃は瓦礫一つない、綺麗な大地が広がっていることでしょうね」

「マジで言ってるやがんのか？ ってことはよ、アーカムト王国に近付いてきてるってのは……」

「本当なのです」

屈託のない笑みで振り向いた。そのとき、町中から人々の悲鳴が木霊した。

「もう、来てますよ」

ミアの背後、空に浮かぶ黒い波が町に押し寄せてきていた。

魔王軍の魔物たちだ。魔王軍が王国を滅ぼしにやってきたのだ。

この目の前にいる少女、魔王ミアが……。

ラストは迫り来る魔物の大群を睨んだ。空を飛ぶ魔物たちに埋め尽くされた空。その禍々しき魔物の姿……！

愛らしい、翼の生えた巨大な黒い猫ちゃんたちだった。

「あれえ？ ちょ、かわ、可愛い！？」

緊張感が一気に死滅した。今までのシリ阿斯展開はどこへ行ったのやら。

すると、黒猫軍団の中でも一際巨大な黒猫の上に、一人の青年がこちらを見下ろし、

「見つけたぞミア！ なにやってんだお前、さっさと戻って来い！」

「あ！ ウィルムくん！ 探しましたよー！」

「探したのはこっちの方だバカ！ ほら、早く乗れ！ 王国滅ぼす

ぞ！」

ハーイ、と無邪気に手を挙げて返事をするミアは、ラストに顔を向けた。

「ウィルムくんも見つかりましたし、これでさようならです。勇者ラストさん。少しの間でしたが、ありがとうございました。一緒に町を見回って、とても楽しかったです」

そう言って、ミアは空間移動で一瞬にして、上空のウィルムが乗っている黒猫の背中の上に移動した。それと同時に、黒猫軍団は一斉に町中に襲撃してきた。

外見は可愛い翼の生えた猫だが、魔王軍の魔物に違いはない。そのとき、何匹かの黒猫がラストの存在に気付き、鋭い牙を剥き出しにして襲い掛かってきた！

「ニャアー！」

インパクトに欠ける魔物だ。

だが、ラストは腰の鞘から勇者の剣を取り出し、しっかりと構える。ついに勇者の戦いが始まったのだ。

「上等だ、全国の猫好きなファンには悪いが、全てぶっ殺してやるぜ……さあて、覚悟しやがれ、魔王軍！」

第4話

勇者が滅ぼされた。

「なんの脈絡もなく主役を滅ぼすな！」

咆哮を上げて迫り来る巨大黒猫の突撃を躲し、地に足が着いたその瞬間、ラストは一気に黒猫に間合いを詰めて両断する。

凶暴なだけで外見は可愛いため、ラストが非道な人間に見える。

「うっせえ！　けど、この剣の切れ味はすげえな。さすが勇者の剣」折れたら爆笑もんだった。

「不吉なことを言うな！」

上空を見上げたラストは、ミアとウィルムの乗っている巨大黒猫を探す。すぐに見つかった。一番大きな黒猫だ。翼だって他の黒猫の倍以上はある。

どうやら城の方へ向かっているらしい。

「あいつら、シャギを狙ってるのか？　まずいな」

町中から響き渡る悲鳴が更に大きくなっている。実際にラストの視界にも、黒猫に襲われている一般人の姿が見える。まずは目の前の人から助けなければならぬ。

しかし、そんなラストの進行を妨害するように、黒猫の大群が前方に出現した。

『ニャアー！』

「うるせえ邪魔だ！　可愛いからってなにしたって許されると思うんじゃないぞ魔物ども！　あとナレーションも黒猫黒猫連呼してんじゃないえよ！　魔物って表現しやがれ！　抵抗あんだよ！　やりづらいんだよ！」

騒ぐな勇者。仕方ないから魔物と表現を戻してやろう。

剣で全て切り捨てようと飛び出したラストだったが、突如、前方の魔物たちに閃光が迸り、全ての魔物が倒される。

「な、なんだ突然？」

眉を顰めたそのときだった。

「勇者！　ここは俺たちに任せて先に行け！」

「俺たちが来たからにはもう大丈夫だ！」

「町の人々は俺たちが守る！　お前は早く国王の救出に！」

「私たちがいるかぎり」

「魔物たちの好きにはさせないぜ！」

家の屋根の上に五つの影が立っていた。一人は赤。一人は青。一人は黄。一人はピンク。一人は黒、戦闘服に身を包んだ者たちが勇者を見下ろしていた。

「誰だこいつらぁー！」

「俺たちはアーカムト王国の平和を守る、ミラクルヒーロー戦隊！」

「五人揃って！」

「アーカムト五人衆！」　「ヒーローズ！」　「ゴレンジャー！」　「ウルトラ兄弟！」　「モッコリーズ！」

「全員バラバラだぁぁー！　何個か名前のパクリもいるしー！」

モッコリーズも捨てがたい。

「どこがだ！」

すると、レッドがラストを指差し、偉そうに発言する。

「勇者ラストよ！　お前は魔王を倒す資格を持つ存在！　今こそ、

貴様の勇者パワーで、魔王軍を滅ぼすのだ！」

「勇者パワーだって！？」

ネーミングセンスのカケラもない。

「そう、勇者パワーとは、愛と勇気を強く持つことで発揮される！　キング・オブ・パワー！」

「マジでセンスのカケラもねえな、んなもんはすでにありきたりなんだよ！　愛と勇気で9900のレベル差を埋められると思うなコンチクショー！」

「さあラスト！　ここは俺たちに任せて先に行けえ！」

「急に死亡フラグ立てるなあ！」

「早く行け！　俺たちが時間を稼いでいるうちに、早く行けえええええ！」

「お前らまだ時間稼ぎしてねえだろが！　お前らこそ早く町の人たちを助けに行け！」

勇者の叫びに、五人組は首肯する。

「わかった！」　「おう！」　「イエス・アイ・アム！」　「ラジャー！」　「任せて！」

「だからバラバラなんだって！　まずはチームワークどうにかしろ！」

五人組は四方八方に飛び散り、魔物の群れを凄まじい勢いで駆逐していく。どうやら力はあるらしい。

「よし、俺も早くミアを追わないとな、城にそう簡単に行かせるか！」

二体の魔物が襲い掛かるも、すかさず一閃を放ち、地面に倒れる。雑魚の相手は時間の無駄だ。ラストは跳躍し、魔物の頭や背中を次々と踏み台にして、ミアたちを追いかける。

と、そこで、下の方から、

「おーい！　勇者さんよー！」

聞き覚えのある声が飛んできた。声の方へ視線を動かすと、そこには先程の武具屋の店主がいる。

「こいつを持ってけえええ！」

そう叫び、なにかをラストへ思い切り投げた。掴み取り、その物体を見てラストは驚き、店主を見る。

「最強の剣だ！　そいつはタダでやるぜ、魔王をぶっ倒してきな！」　「おっさん……ありがとうよ！　あんたの店は商売繁盛するぜ！」

勇者の剣、そして最強の剣という豪華な二刀流装備となったラス

トは気付く。すでに一際巨大な魔物の背に、ミアとウィルムの姿がない。どうやら城内へ侵入してしまったようだ。

そして、魔王たちを運んでいった魔物はこちらをジロリと睨むや、物凄い速さで近付いて来る。

「くっそ、邪魔だバケモノネコ！」

行く手を遮る魔物に、最強の剣の切れ味を試す良い機会。強く剣を握り、魔物を一刀両断とするために、振り下ろし、魔物の皮膚に刃が触れた。

なんと、最強の剣は折れてしまった。

「ハアッ!？」

腹の底から驚愕の声を絞り出した直後、魔物のネコパンチがラストの肉体に直撃し、地面へと叩き落される。

地面は砕け、大きくバウンドするラストは苦痛に悶えながらも、折れた最強の剣を睨み、

「偽物かつ!？ レプリカかつ!？ 最強の剣がポッキーのようにポッキリ折れやがっただっ!？ そんなバカな、そんなバカことがあるはずがないっ! チクシヨオオオオ! あのクソ店主めがあああ！」

これまでにないほどの激昂ぶりは周囲の魔物たちすらも威圧させる。見事なまでのマジグレっぷりだ。もはや勇者がやって良い顔ではなくなっている。

「ニャアー！」

咆哮を上げて追撃してくる魔物に、勇者は双眸を限界まで見開き、血走った眼差しで迫り来る黒き影を睨み付ける。

「エロDVDは観れねえわ、最初の町で魔王に遭遇して瞬殺されるわ、魔王がすっげえ可愛いのに襲えないわ、プレステ4が高すぎるわ、魔王軍が王国に襲撃していきなりのクライマックスだわ、なぜ

かチームワークの悪い戦隊ヒーローがいるわ、最強の剣があっさり折れるわ、俺の性欲が爆発寸前だわ、いい加減にしがれゴラァアァアッ！」

不満たっぷりなブチギレ勇者だ。最後の不満は言わんで結構だ。勇者のキレっぷりに一瞬の動揺を見せた魔物だったが、構わずに鋭い牙を剥き出しにして迫ってくる。しかし勇者も止まらない。勇者の剣で魔物を細切れにする気にいる。

その瞬間。突如、上空から巨大な雷が降り注ぎ、目の前の魔物を貫いた。辺りを包む閃光と爆音。爆風と衝撃。思わず腕で顔を覆うラストは、何事かと見渡した。

「な、なんだ……こりゃ」

目の前には数メートルにも及ぶ巨大なクレーターが出現していた。今の雷によって出来たのだろう。魔物は肉片一つ残らずに消え去っている。

呆然とするラストに、

「どう？ 頭はスッキリしたかしら？ 勇者さん」

と、若い女性の声が降る。隣の家の屋根からだ。振り向くと、そこには、ローブを着た、青い長髪の美女が立っていた。ローブの丈はミニスカートのように短く、世の男性たちを魅了する白い美脚。見えそうで見えないラインは限界を超え、人はこれを穿いてないと呼ぶほどだ。胸はどちらかと言うと大きめ、体のラインも美しい、モデル向けの体格は明らかに注目の的！ これぞ萌え！ これぞ究極！ 世の男たちは声を揃えて叫ぶであろう『グレート・モエ・モエ！』

「叫ぶかあああ！ だから勝手に暴走すんなナレーション！ あの娘のローブの丈は短いけどそこまで短くない！」

その少女のあまりの美しさと可愛さに、ラストの性欲はついに有頂天を超えた！

「有頂天！？」

「ちよっと、ナレーションと漫才しないでよ、私を無視しないでよ

！」

ぷりぷり怒っている。彼女はツンデレのようだ。

「ちょっと強気な女をどうしてもいつもツンデレに限定すんのはやめい！　だから世の中はツンデレブームって騒がれてるんだよ、良いか？　作者はツンデレじゃなく、クーデレとか、無口キャラ萌えなんだよ！」

そこまでは聞いてない。

「誰か知らないが、ありがとな。怒りで正気を失っていた」

「べ、別に、あんたのためにやったんじゃないからね！」

「ツンデレの王道発言！？　典型的なツンデレキャラが出れば良いと思うなコンチクショー！」

「勝手に私をツンデレキャラにしないで下さい」

「急に口調が柔らかくなったよ！　キャラをしっかりと定めろ！」

「ナレーションにも困ったもんだよバカヤロオ！　すると、ツンデレっぽいがツンデレでない口調の定まらない少女は言う。」

「どんなキャラだよ」

「私の名前はカーシュ。大賢者って呼ばれているの、知らない？」

カーシュと名乗る少女に、ラストは息を呑んだ。

「大賢者？　その異名を持つのは、ゼルギアース最強の魔力を持つ人間と言われているが、あんたがそうなのか？」

勇者の問いに、大賢者は首肯した。

「そうみたい。それよりも、魔王ミアと霸王ウィルムが城に入ってしまったんでしょ？　早く行きましょ！」

「っと、そうだったな！　そうだ、俺の名はラストだ。知っての通り、勇者やってまーす」

「そう、じゃ、力を合わせて魔王退治と行きましょか、ラスト！」

「おまけで霸王退治もだな。そんじゃ行くぜ、カーシュ！」

カーシュが仲間になった！

こうして、勇者と賢者のコンビが誕生し、二人は戦乱渦巻くアーカムト城へと急いだ。ラストは地面を走り、カーシュは魔法で空を飛んでいる。

「なに！？　なんでこの角度からパンツが見えない！？　どういう原理だ！」

「ええ！？　ちよつ、やつ！　なに見てるのよ！」
こんなんで果たして大丈夫なのだろうか。

第5話

アリの大群が二匹のゾウに勝てるだろうか？

アリがただのアリでなく、軍隊アリならば確実だろうが、このアリたちはただの兵隊アリだ。ましてや相手はゾウの中でも頂点に君臨する凶暴な二匹のゾウ。

アーカムト城の何千何万もの兵士たちは、魔王と霸王の二人を相手に手も足もでない。千切っては投げ、千切っては投げ、どころの話ですらない。近付いたら吹き飛ばされ、近付いたら吹き飛ばされ、触れることもなく、魔王と霸王は体内から発する魔力の風だけで敵を薙ぎ払う。中には城のメイドたちも混じっており、逃げようとしていたのを二人の魔力に巻き込まれてしまったのだろう。

……力の差がとんでもないことになっている。これが雑魚兵士たちの存在する証なのだろうか。哀しい存在の証だ。これではどこぞの三国志の一騎当千ゲームすら霞んで見える。

ミアの撃破数Ⅱ9999人

ウィルムの撃破数Ⅱ10000人

「そなたこそ、真の兵士無双なり！」

「なんだそりゃ」

「万人殺し達成のお祝いの言葉なのです。ウィルムくんは働き屋さんなのです！」

「あ？ 相手が弱すぎるだけだ。お前だって俺とそう変わんねえだろ」

ウィルムがそう言うと、背後から兵士がミアに剣を振るって襲い掛かった。だが、剣が彼女に触れることなく、兵士は大きな鉄球を正面から直撃したような衝撃を浴び、絶命する。

「やりましたウィルムくん！ 私も万人殺しです！」

「そっかそっか、おめでとさん」

興味がないのか、軽くあしらうウィルムに対し、ミアは動かして

いた足を止めてしまう。今までは笑顔だった彼女も、どこか寂しうに顔を歪ませて、俯いてしまう。

気付いたウィルムは慌てて振り向く。

「……やっぱり、怒ってるんでしょうか？ 私が突っ走って先に王国に来て、すぐに迷子になってしまったことを……すいません。私、王国を滅ぼせるって浮かれてしまっただけで、後ろにウィルムくんが着いて来ていると思って駆け足で向かってしまったんです。私がついて周りを見ていれば、ウィルムくんにも迷惑をかけないで済んだというのに……」

完全に落ち込み、その両目にはきらりと光るものが見えた。

「バツ！ か、勘違いすんな！ そりゃ、お前が急に全力スピードで走ってどっか消えたのには焦ったけどよ、冷静に考えりゃ王国に向かうってことはわかってたんだ。なのに、俺はバカだから、お前の姿が見えなくなって、頭が真っ白になって、なんか、パニックで迎えにくんのが遅れちゃったんだ！」

とにかく、と、ウィルムは言い、

「ミアはなんにも悪くねえよ、俺だって迷惑なんて思っちゃいねえ、ただ俺は、変な男とミアが仲良くしてたみたいだから、それに無性に腹がた……っ！？」

そこでなぜか顔を真っ赤にさせて、ウィルムはミアに背を向け、心臓に手を押し当てる。

（なんだなんだ！？ これじゃまるで俺が嫉妬してるみてえじゃねえかよ！ 嫉妬？ 嫉妬ってなんだ？ んなもん俺に関係ねえだろ、そうだ、ミアと変な男が仲良くしてそうに見えたからなんだってんだ、俺に関係なんて一切ねえ！ そう、一切ねえんだ！）

だが、と、思い直す。ミアとラストが向かい合って笑顔でいる光景を思い出したウィルムは不機嫌そうな顔になり……。

（なぜかムカつく）

若いな、覇王ウィルム。

「なにがだっ！？」

「あ、あのーウィルムくん？」

なにがなんだかわからないミアは首を傾げている。ウィルムは話を逸らすように咳をして、ミアに向き直る。

「とにかく！ さっさとシャギって王を殺しに行くぞ。玉座の間まではあともう少しだ」

「それってあの大きな扉の向こうでしょうか？ 今までにない強い気配もしますし」

「だろうな、ちゃっちゃと行ってちゃっちゃと終わらせるぞ、面倒な奴はシャギだけだしな」

彼の発言に対し、ミアは楽しそうに微笑んで、

「果たしてどうでしょうか？」

「あ？」

意味深な魔王の言葉に、霸王は首を傾げるばかりだった。

二人は城内を進む。その目立つ扉の前に立ち、ウィルムが手をかざすと、扉はウィルムという存在から逃げるように内側へ破碎した。途端。ミアたちの視界の奥。玉座の間と呼ばれる広間の奥に佇む玉座に座る影がある。

「ようこそ、二人の王」

愉快そうに出迎えてくれた人間の王シャギ。いつの間にかその手には拳銃が握られており、銃口をミアたちに向けている。

それが合図だった。玉座の後ろ、天井、床、壁。広間のありとあらゆる場所からライフルを構えた兵士たちが王の両脇を固めるように出現し、百数の銃口が魔王と霸王へ向けられる。

シャギは続けた。

「そして、さようなら」

一斉に、銃撃が横叩きの雨となり、轟音、豪雨となって降り注いだ。即座にシャギはどこからかバズーカ砲を取り出し、肩に担ぎ、銃撃に動きを止める二人の王へと照準を合わせて砲撃する。

玉座の間の入り口は消し飛んだ。煙が舞い上がり、銃撃が止む。静寂が耳に嫌な感触を残してくれる。このまま無言が続くかと思

きや、一人の兵士が緊張に耐え切れずに、

「や、やったか!？」

その失言に、シャギは苦笑して、

「それはフラグだよ」

と、溜息混じりに言ったと同時に、その発言をした兵士の体が瞬く間にブクブクと風船のように膨張し、爆発した。四散する兵士の肉塊は雨となって広間に降り注ぐ。周囲の兵士たちの悲鳴が木霊する中、シャギは至って冷静だ。

煙が晴れると、ミアとウィルムは平気な顔で、傷一つない綺麗な体で姿を見せる。

「やっぱ、楽しめそうなのはシャギだけか」

「ウィルムくん。皆さんが怯えていて可哀想です。先に楽にさせた方が良いと思いますです」

「魔王さまの命令とあらば。んじゃ、まずは雑魚片付けだ」

遂に玉座の間に、霸王が堂々と踏み込んだ。この広間を包むのは、兵士たちの絶望と恐怖。そして、ウィルムの力であった。

——二人疾走中——

ようやく城内へ入ったラストとカーシュは、息絶えた兵士の屍の道を疾走していた。

「なんでだ!　なんで絶対に見えるはずの角度からパンツが見えない!？」

そんな状況など無視して、この勇者はまだ下らないことを引っ張っていた。

「だから、変なところ覗かないでよ!」

「そうか……ようやくわかったぞ、これが『穿いてない』というものののか!　これがっ!　穿いてないというっ!　その姿のっ!　原理だっ!？」

勝手に一人で納得して、大仰に声を張り上げている。恥ずかしい

勇者だ。

しかし、本当にパンツが見えない。絶対にパンツがチラと姿を現す角度だというのに、パンツのパの字も見えずに、生の肌が見えるばかり。どういうことだ？ どういうことだっ！？

「ナレーションも人のこと言えないじゃない！」

「ふっ、恥ずかしいナレーションだ」

「そういうあんたは、さっきから一体なにを背負ってんのよ！」

「え、ダッチワイフに決まってるだろ？ 兵士の死体の山の中に、可愛いメイドの人形さんが落ちてたんだよ。なんか目の焦点が合っていないし、所々に血が付着しているけどね、あとなんか口と目からも血を流してるけど」

それはどう考えてもヤバイ気がする。

「なんかほんのり温もり感じるけど、誰か使用した後かな？ 新品なら良かったんだけどな。あ、でもちよつとずつ冷たくなってきてるや」

「待って！ ねえ待って！ それ絶対に人形じゃないわよ！ それ絶対にさっきまで本当に城のメイドさんやってた人よ！ それ生よ！」

「んなわけねえだろ、なんで兵士たちの死体に紛れて、メイドさんが死んでなきやいけねえんだよ」

なんで兵士たちの死体に紛れて、ダッチワイフが落ちてなきやいけねえのか現実的に考えてくれ。

「現実的に考えてるよ、ミアたちぶっ倒したら、家で性欲処理すんだよ。あー良かった良かった。エロDVDが観れなくて愕然としたが、ダッチワイフがあれば文句ねえわ、ちゃんと血とか洗えば問題ねえだろ」

「やめなさい！ それ絶対に腐るわよ！ 腐って、あんた、偉いことになるわよ！ 呪われるわよ！」

「なにバカなことやってんだ！ さもこのダッチワイフがさっきまで生きてたかのような言い方すんじゃないよ！」

「そう言ってるのよ！　なんであんたはダッチワイフだって決め付けられるのよ！　そもそもその娘の顔をよく見なさい！　生前は可愛かったと思うけど、今じゃお岩さんみたいな顔になってるわよ！　あんたそんなので興奮出来るわけ！？」

「俺に必要なのは性欲処理だ！　性欲さえどうにか出来れば文句はねえ！」

なりふり構わないのかこの勇者は。

性欲のためにここまで暴走出来るとは、いろんな意味で勇者だぞ、ラスト。

そんな変態勇者はメイドの死体を背負いながら、下品な笑みをカーシュに向ける。

「はっはーそうかそうか、わかったぞカーシュ。お前、このダッチワイフを俺から奪いたいんだろ？」

「なんのためによ！」

「性欲処理」

「ふざけんじゃないわよ！　あたしゃ女よ！　あとそんなの欲しがるのは死体コレクターくらいよ！　というかもうその娘が可哀想よ、お墓を作ればきっと彼女も喜ぶわ！」

「俺の性欲処理のメイドちゃんを埋葬する気かテメェ！」

「あんたさっきから性欲処理って単語しか言っていないじゃない！　なに？　セクハラ？　なんで仲間になったばっかでお互いのことよく知らないのにここまで漫才出来るのよ！　私って凄いわね、いや、あんたが凄すぎるだけよ！　凄すぎて、変態よ！」

「俺のどこが変態なんだよ！」

本気で言ってるのか。

と、ラストは兵士の死体を踏ん付けてしまい、ズルツと肉が滑り、派手に転んでしまう。

「おわっ！　痛ってえ……」

「ちよっと、ラスト、大丈夫？」

「大丈夫だ、それより俺の性欲処理は……なっ！」

慌てて探すラストだったが、眼前に広がる光景に息を呑んだ。

倒れる兵士たちに混じり、メイドの死体が山となって、血溜まりとなった通路に沈んでいた。その無残な光景に、カーシュは手で口を押さえる。

「酷い……魔王も霸王も、人間をなんだと思ってるのよ……こんな惨い殺し方をするなんて」

最も、魔王と霸王はただ魔力を発しているだけで、意図してこのような光景を作り出しているわけではないのだが、死体はどれも体の向きが異様で、臓物と血で埋め尽くされている。ミアたちの魔力に耐え切れないだけで、兵士やメイドたちの肉体や内臓は爆ぜるのだ。

「こ……これは……血、内臓……まさか、メイドはダッチワイフじゃないく、本物の人間だったっていうのか……」

ようやく気付いたのか。

「くそ……ミアめ。よくも、よくも……俺に過度な期待をさせやがってえ！」

勇者は最悪だった。

だがカーシュは気付く、言動は空気の読めない変態発言だが、ラストの右手は強く握り締められ、血が滴り落ちている。

怒りだ。ラストは城の兵士やメイドたちを全て惨殺するミアたちに怒りを露にしているのだ。

「どうやら、ふざけるのはここまでだな。カーシュ、玉座の間はすぐそこだ。絶対に魔王たちを倒すぞ」

「……ええ、もちろんよ」

カーシュは首肯した。そして二人は前へ進む。玉座の間へと、シヤギを助け、魔王を倒すために。

「だが、俺の性欲は限界突破中だ。すまんがカーシュ……抱かせてくれ」

「ざけんなっ！」

空気をぶち壊した。そしてカーシュもキレた。

「どうでも良いけどよ、この小説って女性には拒絶反応が起こってるんじゃない？」

「あんたが言わないでよ！ 誰の所為だと思ってるのよ！」

「罵詈雑言の抗議が来たらやだなー」

「男性から苦情が来るんじゃないの？」

「俺のかつこよさに嫉妬か？」

「こいつバカよ！ 勇者としてあるまじきバカよ！」

ここまで変態的な発言を連発する勇者はいままでにいたであろうか？ いたとしても見たくないもんだ。

そんなこんなで、勇者と賢者は玉座の間の扉の前へ辿り着く。緊張で生唾を飲んだ。

「よし、こっからはおふざけなしだ」

「でもふざけるんでしょ？」

「あ、わかっちゃった？」

今回のラストは終始ボケに徹していた。ボケというか、完全に変態に成り下がっていたが。

「よっしゃ、待たせたなシャギ！ 覚悟だミア！」

ラストとカーシュは扉を開けた。眼下に広がるのは兵士たちの死体の山。玉座にシャギは座っていなかったので、まさか死んでしまったのかと思いきや……。

「あ、やりました！ 革命です！」

「残念だったねミアちゃん。秘技・革命返し」

「ああーそんなあー」

「デメエ、容赦ねえな」

——三人仲良く大富豪をやっていた。

「なにやってんだこいつらああああ！？」

最後の最後でラストは突っ込んだ。

第6話

辿り着いたラストとカーシュの姿に、ミアとシャギは笑みを浮かべる。ウィルムは怪訝な眼差しで乱入者を睥睨。

「大賢者……それと、ミアと仲良く一緒にいた奴じゃねえか」

「その人はラストさんです。勇者さんらしいです」

「勇者？　へえ、こいつがか」

怪訝は警戒、そして落胆の眼差しへと変わる。

ラストはウィルムの視線の変化に気付き、表情が険しくなる。

「なんだ？　勇者の癖に弱そうだなって顔はよ！」

「まだ言ってねえよ、当たってるけどな」

「余裕ぶっこくのも今のうちだ。シャギ、安心しろ、助けに来たぞ！」

勇者がシャギに視線を向けて言うのと、

「はい、あがり」

「まだ大富豪やってたの！？」

強いぞ国王。魔王と覇王を相手に見事な一抜けだ。

「ああー負けてしまいました」

「くそが、手加減しやがれこの野郎！」

「あんたらもなにマジになってんだよ！　シャギ殺しに来たのになんで仲良く大富豪やってんだよ！」

勇者の当然の疑問に対し、シャギは立ち上がり、さも当然のように、

「僕が提案したのだよ、魔王の目的がなにか、僕を殺してどうしたいのか、いろいろ知りたいからね。大富豪をやることで全てを知ることができるのさ」

「大富豪やりゃ心で語り合えるってのか？」

よく男が口にする、言葉じゃなく拳で語り合うのさ、的なノリである。

「え、そうだったんですかウィルムくん？ 私、全くシャギさんのことなんかわかりませんでしたけど」

「ってか普通に遊んでただけだし、深い理由なんてねえし」

「語り合えてない！？」

「あれえ？ おかしいね」

とんだホラ吹きだ。

シャギは全てなかったことにしようとランプを壁にぶん投げた。

「おいコラ、思い通りにならなかったからってヤケになってんじゃねえ！」

「なんか城の人たちが無駄死にのように思えてきたわ」

ラストとカーシュは深い溜息を吐くと、途端に全身の鳥肌が総毛立つ。

とてつもなく強烈な魔力の風が前方から、二人の王から放出されていたのだ。

「それでは、さっそく始めましょうか、ウィルムくん」

「だな、国王シャギと大賢者カーシュ。おまけで勇者ラストをぶっ倒して、人間を滅ぼすか」

圧倒的な威圧感だった。とても楽しそうに大富豪をやっていた奴らとは思えない、桁外れの魔力。大賢者と謳われるカーシュでさえも、震えてしまうほどの実力の差を感じ取ってしまった。

「人間を滅ぼし、竜族、妖精族を滅ぼし、世界支配かな？ そうは問屋が……」

彼の両手には二丁の拳銃が握られていた。二つの銃口を二人の王の眼前へと向ける。

同時に、カーシュの隣にいた彼も、いつの間にか剣を抜いていた。両足に力を注ぎ込み、床を破碎して、

「卸さない！」

シャギによる二発の銃声と共に、銃弾が発射された直後。ミアとウィルムはしっかりと弾丸を瞳に捕らえ、頭を横にずらすだけで回避した。

壁に避けられた弾がめり込んだ途端に、ラストは三人の王の中央に踏み込んでいた。振り返り、人間ではない二人の王を視界に捉え、全速全力の一太刀を、覇王ではなく魔王へ放つ。

伝わった感触はミアを斬ったものではない、鉄と斬り合う感触。ラストの剣の軌道上には、ウィルムが振るう大剣の姿があった。いつの間に――。

脅威のスピードに咄然とするラストのおでこに向けて、可愛らしい魔王の右手が伸びる。手の形はデコピンだ。

勇者の脳裏に恐ろしい破壊力が思い出される。ミアはいつもどおりの天使のような笑顔で、

「びっくりするぐらい……弱すぎですよ、ラストさん」

肉片一つ残らなくなる。とんでもない破壊力のデコピンが炸裂する瞬間。

巨大な火炎の渦が襲い掛かった。カーシュの魔法攻撃だ。

ミアは即座にデコピンの修正をそちらに向け、火炎に向けて打ち放つ。火炎はデコピンの衝撃により、跡形もなく消し飛んだ。

「ラストくんっ！」

「っ！」

一瞬の隙を見逃さずに、シャギは銃弾の雨をミアたちに打ち込んだ。何発か被弾して二人は下がるが、傷は凄まじい勢いで塞がっていく。

後ろへ下がったと同時に、ラストの一閃がミアの胴に軌跡を描く。やったと思ったが、すぐに表情は険しくなった。ラストの剣はミアの胴体を斬っていない。直前に、ミアの人差し指が剣を受け止めていた。

「申し訳ありませんが、本当に弱いんですよ、ラストさん」

「そういうわけだとよ、勇者野郎」

すぐ真横に、ウィルムの大剣が迫っていた。

――避けられない――防御を――ダメか――死――!?

ラストの心理描写はマジで自分の死を予感していた。絶対的な力の差とはこのことだ。

だが、すかさずカーシュがウィルムに雷の矢を投射し、そちらに気を向けた瞬間に、ラストはウィルムに蹴りを叩き込んでこの距離から脱出する。

その場の全員が睨み合う。魔王と覇王の表情は余裕に対し、こちららは深刻な表情となっていた。

「ちっ、死にかけた! マジで死にかけた! どうしてくれんだ、あと少しでエロいことできなくなるとこだった!」

「ラストくん。死を感じ取った感想にしてはどうかと思うよ、それ」
「どうなってんのよ、私の魔法が効かないじゃない!」

三者三様。それぞれが口にする、ミアとウィルムは、

「あーこれは、期待外れですかね」

「これが人間最後の砦ってか? これなら警戒すんのは童王や妖精王だけで十分だな」

失望にも似た感情を吐露している。

すると、ウィルムは、

「シャギも所詮はただの人間だったか、こっちは本気で警戒してたんだがな」

と、睨んで言う。シャギは肩をすくめて苦笑すると、今度はラストに視線を向ける。

「勇者も勇者だ。魔王であるミアを脅かす存在だと思って見てみれば、とんだ小物か。マジで落胆だ」

言い返すこともせず、ラストはじつとウィルムを見据える。

「大賢者とやらも、人間最強の魔力を持つとか言われて、この程度。人間ってのは脆い生き物だ。抵抗力すらない弱者だな」

「くっ……」

反論しようにも、実力の差が歴然としていることから、なにも言えない。

すると、ラストは落ち着いた口振りで、

「俺らを殺して、人間の絶滅ってか？　その後はどうするつもりだ？」

唐突に、そんなことを言い出して、

「この世界、ゼルギアースには四つの種族がいます。人間族、竜族、妖精族、そして私たち魔族。もちろん、人間族を滅ぼしたら、竜族と妖精族も全滅させますよ」

と、ミアは優しく微笑んで説明した。

そんな説明に、ラストは「ああ」と天井を仰ぎ、

「最終的な勝者は魔族ってか？　魔族にとっては、それはハッピーエンドだろうが……」

再び、ミアたちに視線を向けた。

「ハッピーエンドを掴むのは、この勇者^{おれ}だ」

絶望ではない、力強い希望の瞳が魔王と覇王に、国王と賢者に驚きを与える。

この状況下で絶望せずに、さも勝てるかのような希望を持つ勇者に対し、正気かと覇王は疑う。

圧倒的な実力差を理解しながら、バッドエンドを認めずにハッピーエンドを、しかも、人間のハッピーエンドではなく、『勇者』のみのハッピーエンドを宣言した勇者に対し、魔王は消えかかっていた期待に再び火がついた。

「面白い！　ならば、徹底的に、希望が絶望に変わるまで、蹴り殺してあげます！」

「油断してんじゃねえぞコラ、テメエ、絶対にボコボコにして、泣き叫んで許しを乞うまで犯し尽くしてやらあ」

——どっちが勇者でどっちが魔王かよくわからなくなってきた。

「ラストくん、エロDVDをあげた意味がないじゃないか」

「ちょっとラスト、あんた変態発言はほどほどにしないよ」

「犯すう？ オイテメエ勇者、ミアになにするつもりだ、殺すぞっ！」

「霸王はともかく、なんで二人まで俺にばっか非難を浴びせるんだよ！？」

叫んだラストは、笑みを浮かべて剣を握る。こんな状況でもまだ諦めない心だけは、勇者として褒め称えられる。

すると、シャギが、

「当然だ、勇者は絶望などしないさ、なぜなら勇者なのだから。そして僕も諦めないね、やらねばならぬことが山ほどあるのだから。さて、援軍を呼ぼうか」

『援軍！？』

シャギの言葉にその場にいた全員が声を揃える。この状況を変えることのできる味方が現れるというのか、期待するラストとカーシユ。

そのとき！

「待たせたなっ！」

玉座の間の入り口から声がした。全員の視線がそちらに向くと、そこには五つの影が立っていた。

「私たちがいる限り！」

「勇者たちは死なせない！」

「魔王と霸王をぶっ倒し！」

「掴んで見せよう我らの勝利！」

「叫べ！ 轟け！ 我ら、五人揃って！」

「ファンタジーズ！」 「コマネチレンジャー！」 「ミラクル五人衆！」 「エロエロマン！」 「犯罪応援隊！」

「またお前らかああああ！　しかもやっぱバラバラだしいい！　さつきと名前が全員違ってるしいい！」

最強の援軍の到着に、勝利を確信したラストたち。

果たして、『幻想戦隊デストロイジャー』は魔王たちを倒し、世界を平和にできるのであるか！？

「おい！　ナレーシヨンの言った戦隊名を使え！　そうしろ！　絶対それの方がカッコイイから！」

「行くぞ魔王ミア！　霸王ウィルム！　俺たち『陵辱戦隊レイプレンジャー』が成敗してくれる！」

「なんで名前変えたあ！？　しかもお前ら、最低最悪のネーミングだぞその戦隊名！　捕まるぞ！　正義じゃねえぞ！　お前ら、俺よりいろいろやべえぞ！」

次回に続く！

「勝手に終わらすなあ！　奴らが主役みたいなノリはやめろコラア！」

ミアとウィルムは、突如現れた援軍を、呆然と見つめていた。

「絶対に引いてるぞ、魔王と霸王が引いてるぞ」

今度こそ、次回に続く！

最終話

この連載小説は未完結のまま約2年以上の間、更新されていません。

今後、次話投稿されない可能性が極めて高いです。予めご了承下さい。

「……………」

窓のカーテンから差し込む朝日が眩しい。ラストは目を擦らせて、微睡みから覚めた。

「いや、ちょっと……」

長い夢を見ていた気がする。それは良い夢なのか悪い夢なのか思いつけない。

おかしいな――。

ラストはボーっとした頭で考える。でも思いつけない。そもそも夢とはそういうものだ。思いつけそうで思いつけない、良い夢なのか悪い夢なのかさえ思いつけない時もある。いや、そもそも夢を見ていたのかどうかさえも。

「だから、あのさ、俺――」

夢なんてどうだって良いさ、大事なのは今を生きてるってことなんだから！

さあ、洗面所に行って顔を洗おう！ 歯を磨こう！ いやいや、まずはトイレかな？ なにが起きたって驚かないぜ、今日から新たな一日が始まるんだ！ 「行くぞ！ あの夕日に向かって！」 ラストは誰もいない寝室で大声を出した。

「だからあああああちよつと待てつつてんだろぅが！ なんだ、勝手に人の心理描写捏造してんじゃねえよ！ 寝起きに夕日に向かってって叫ぶ奴どこにいたんだよ！ そもそも、えっと、まずどっから突っ込めば良いんだ！」

そんなの自分で考えろ。

「よっしゃあ teme、語り部。喧嘩すんの二年ぶりだなあ、つていうか、二年？ そうだ！ 二年間なに連載中の小説放置してやがった」

放置していません。ラストはどうしてしまったのでしょうか。

「惚けるのは良いんだが、思いっきり冒頭に注意書き書いてるぞ、よく連載ストップしてる作家のページで見かける文章だぞ。あと投稿日見ると一目瞭然だろが」

二年ではありません、二年と三ヶ月ほどです。

「細かいこと堂々と書きなおすんじゃない！ 二年間放置の理由は！」

作者のリアルが忙しかった。気付いたら書くことを忘れていた。そのまま二年の月日が流れていた。

反省はしている。けど後悔はしていない。

「やめろなんか犯罪者みたいなこと言うな！」

いやーしかし二年の時というのは長いね。世の中いろんな出来事が起きてるよ。さあ、思い出してみようか、二年前、皆さんはどういう生活をしていただろうか。

「思い返さなくて良いんだよ！ 大事なのはこの物語をどうするかだ！ えっと、確か前回は幻想戦隊デストロイジャーが助けに来て――」

ああ、もう全部夢オチで片付けたから。

「おいしいマジかよ teme、やっちゃいけないことやりがったな。丸投げかよ、丸投げなのか」

だって、二年放置してるもん連載再開したってしょーがねえだろ。「なんでキレ口調なんだよキレたいのこっちだよ、読者だよ。二年間放置しての再開でしょ、リアルの方だって数年間放置してた小説の続きが出ることだってあるんだよ！ ファンは支えてくれるんだよ！」

ヒュンケルにファンがいるわけないでしょ！

「それはそうだが、今度は自虐ネタか、とにかく文字数稼ぐ気だなこいつ。とにかく、一体どうするんだ、今までの流れをぶった切っちゃまったし、なんかこれで打ち切りみたいな展開だし」

というか、ファンタジーっぽいものは今回で最終回にします。

「マジか」

そして、新連載「真・ファンタジーっぽいもの（タイトル未定）」の連載再開をここに宣言します。

「要は作り直しか」

タイトルはまだ考えてます。まあ、二年のブランクあるんでラスト主人公で適当に長編書きます。

「適当って言うな、真面目に書け」

あと、作者の名前も次回作投稿と同時にヒュンケルから町長に変わります。

「いや、それはどうだって……いや、そもそもこれはもはや小説じゃなくただの生存報告になってるんだが」

だってそうだし。

「せめて強引にでも良いからちゃんと書いて終わらせりゃ良いのに」無理矢理な締めって嫌いだし」。

「この時点で無理矢理な締めなんだが」

というわけで！ おそらくこんな小説の存在を覚えている方はいらっしゃらないと思いますが。私、ヒュンケル改め町長は小説家になろうに復帰します。

ファンタジーっぽいものを楽しみにしていた読者の方には、本当に申し訳ない気持ちで一杯です。

新連載もしばらくしたら投稿しますので、応援していただければなと思います。

「今度は失踪するなよ」

はい、失踪は絶対にしません。せめて強引に終わらせます！
「それもダメ！」

では最後に。

「ん？」

「そ、そんな……まさかこの魔王ミアが……！」

「これが幻想戦隊デストロイジャーの最後の力！　喰らえ、魔王ミア！」

「き、きゃー！」

こうして、魔王ミアは倒され、世界は平和になった。
ありがとう、幻想戦隊デストロイジャー！

〽完〽

「ダメだ、この作者、早くなんとかしないと」

ヒュンケル改め町長先生の次回作にご期待下さい。

「期待できるかぁ！」

最終話（後書き）

はい、二年間の放置本当に申し訳ありませんでした。

今後も新連載ということでファンタジー小説を書く予定です。

更新速度がどうなるかわかりませんが、失踪はしないようにします。

では、また近いうちにお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8745g/>

ファンタジーっぽいもの

2011年8月8日03時11分発行